OPEN 創刊号 特集記事 OPEN

現場と研究の乖離は長年の問題であり、その間を埋めるべく“bridge the gap”というキャッチフレーズが使われてきている。本研究会の設立目的の一つでもある“両者間の流動性を高める”ということも、これと同義である。その隙間は、何故なかなか埋まらないのだろうか？
この創刊号では Open をテーマに掲げた。研究者サイドでは、“Open your door”を心がけ、自身の研究内容を簡易な表現でわかりやすく説明することによって、誰でも理解できるようにすること、などがドアを開放することにつながるであろう。一方、現場サイドでは、“Open your windows”を心がける。勝負の世界に生きていると、自分の手の内を全て open にしてしまうことはできない。しかし、だからと言って自分だけ、あるいは自分の周りの小さな集団の殻に閉じこもっていては勝負には勝てない。心の窓を開けて、いろいろな情報を取り込むことが必要となってくる。この“Open your door”と“Open your windows”の精神を保つことで、意識的・無意識的な心の壁を取り払うと、先に述べた gap は急速に小さくなっていくものと考えられる。多くの野球人たちに open な視界を提供するという目的で、本誌は新装 open する。

平野　裕一　野球科学研究会・代表
法政大学スポーツ健康学部教授

東京生まれ．東京大学大学院教育学研究科博士課程終了後，東京大学大学院教育学研究科・助教授，国立スポーツ科学センタースポーツ科学研究部・部長，副センター長を経て，現在　法政大学スポーツ健康学部・教授．スポーツバイオメカニクス，トレーニング科学を専門としている．1980 年～ 1982 年，1990 年～ 1996 年　東京大学硬式野球部監督．2013 年～全日本野球協会・選手強化委員会・医科学部会員．

1．Open 化への私の想い

研究会を Open 化するとは「誰でも参加していいですよ」とすることだが，参加する価値がなければ人は参加しない．研究会の目的の1つである「指導現場と研究者間での情報の流動性を高める」ためには双方の価値を備えなければならない．現場の人が研究発表を聴く受動の価値だけでなく，現状や要望を発信する能動の価値ももっと多く備えたい．ブース展示だけから企業の人が昼休みに話をする場もつくった学会が多くなったが，企業の人が研究者の前で話す難しさを解消した学会があるだろうか？同様に指導者も研究者の前では話し難いと聞く．桑田さんのような人ばかりではない．何かそこに新しい仕掛けが必要である．「現場の人が参加しなくなったら，研究したことが現場に伝わらない」とびわ湖での立ち上げの会で言ったつもりである．

技術が優先する野球ではどうしてもバイオメカニクスの研究発表が多くなるが，技術だけで野球が生み出されるわけではない．国立スポーツ科学センターにおける医・科学支援で，バイオメカニクスや運動生理学と栄養，心理，トレーニング，映像技術，身体のケアとを一緒に考えてはいけないことを痛感した．現場にとって前者は必要な時に活用する科学で，後者は毎日活用する科学だからである．いわば後方支援と最前線支援の違いである．現場にとっての価値を増すためにも最前線の発表がもっと増えてほしい．現場に訴えかけるものが多かった中京大でのデータ野球シンポジウムのような発表である．また，国立スポーツ科学センターでの侍ジャパンのマネージメント話も思い出される．ただ両方ともお願いして話してもらったのだった．自発的な発表が望まれるところである．スポーツの科学は本質を解明することをもちろん目指すべきだが，指導の現場に役立ってこその科学という側面ももつ．現場を考えなくてもよいのは哲学と理学ぐらいなものだと聞いたことがある．

そして開催は参加しやすい場所と時季でありたい．遠隔地の大学は学生が参じやすいようにと都会にサテライトキャンパスを置いている．参加しやすい場所が重要とわかっているからである．そもそも大学のキャンパスで研究会を開催する必要はなく，都会にある安価な会議場でもよいし，気楽に話せる温泉地でもよい．皆が参じやすい場所であればよいのである．また現在，12 月初旬から中旬に研究会を開催しているのはオフシーズンだからであるが，野球のイベントはこのシーズンに目白押しである．現場を考えると時季としてオフシーズンは外せないので，つくば野球研究会と一緒にやったように他のイベントとの合同も1つの手である．それがグローバルなイベントであればこの上ない．

目玉となる野球人を招いて話をしてもらうことも価値を大きくするが，話をしてもらうに留まることはない．デモンストレーションもコーチングもありである．研究会の参加者が身体を動かすことが好きなのはびわ湖でのソフトボールで証明されている．また，別の競技の人を招いて話をしてもらうのも面白い．サッカーの指導者育成システムの話が役立ったことは東大で実証済みである．競技を横断してのコミュニケーションがとれて成功したナショナルトレーニングセンターを見習うべきである．

年 1 回の研究会開催とウエブジャーナル発行に加えてさらなる事業を展開しようとすれば，広報や営業活動をしてビジネス化を図る必要がある．当面は身の丈の事業を進めることにして研究会への人の出入りだけは自由にしておきたい．

2. Open 化への私の役割

研究会の Open 化のために，野球界ではどのような活動が行われているか？を紹介するのが私の役割の1つだろう．

現在の野球の組織は，日本オリンピック委員会（JOC）に加盟している全日本野球協会（BFJ）があって，アジア野球連盟（BFA）を介して世界野球ソフトボール連盟（WBSC）につながっている．つまり BFJ は国際大会に参加するためにつくられた組織である．この下に社会人，女子，子どもの野球が属する日本野球連盟（JABA），高校や大学野球が属する日本学生野球協会，そして軟式の全日本軟式野球連盟が並列している．

BFJ の中には各種委員会があって，そのうちの選手強化委員会の中の医科学部会に私は所属している．部会長は整形外科医，東京明日佳病院の渡邊幹彦先生であり，栄養の海老久美子さんと私を除くと残りの 7 人は医師とトレーナーである．そこでは年度ごとに行われる国際大会および大会のための合宿に医師とトレーナーを派遣して怪我の予防と治療，コンディションの維持にあたっている．U-12 軟式からトップそして女子までを含めた 10 カテゴリーに対して，今年度は 8 つの国際大会を対象としている．以前は科学的な活動を提案して，合宿などで体力測定や映像撮影を行っていたりしたが，予算の都合もあって現在は休止している．いつかこの研究会でそうした活動を引き受けたい．

一方，プロ野球が属する日本野球機構（NPB）と BFJ が一緒になって 2016 年度より日本野球協議会が発足した．以前にあった全日本野球会議を引き継いだものである．2020 年東京オリ・パラ大会が決まったことと野球人口が減っていることから組織されたのだろう．私はこの協議会に所属していないが，BFJ の医科学部会でこの協議会の医科学部会の報告を受けるし，協議会の委員の方からも話を伺ったのでここで少し紹介したい．

この協議会には BFJ と同じように以下のような委員会があって，その下に部会が連なっている．

- 普及振興委員会
  - 普及振興策検討部会
  - 資格制度検討部会
  - 女子部会
  - 統計調査部会
- 侍ジャパン強化委員会
- マーケティング委員会
- オペレーション委員会
  - 審判部会
  - 記録部会
  - 医科学部会
- 国際委員会
- 未来構想・宣言 PT

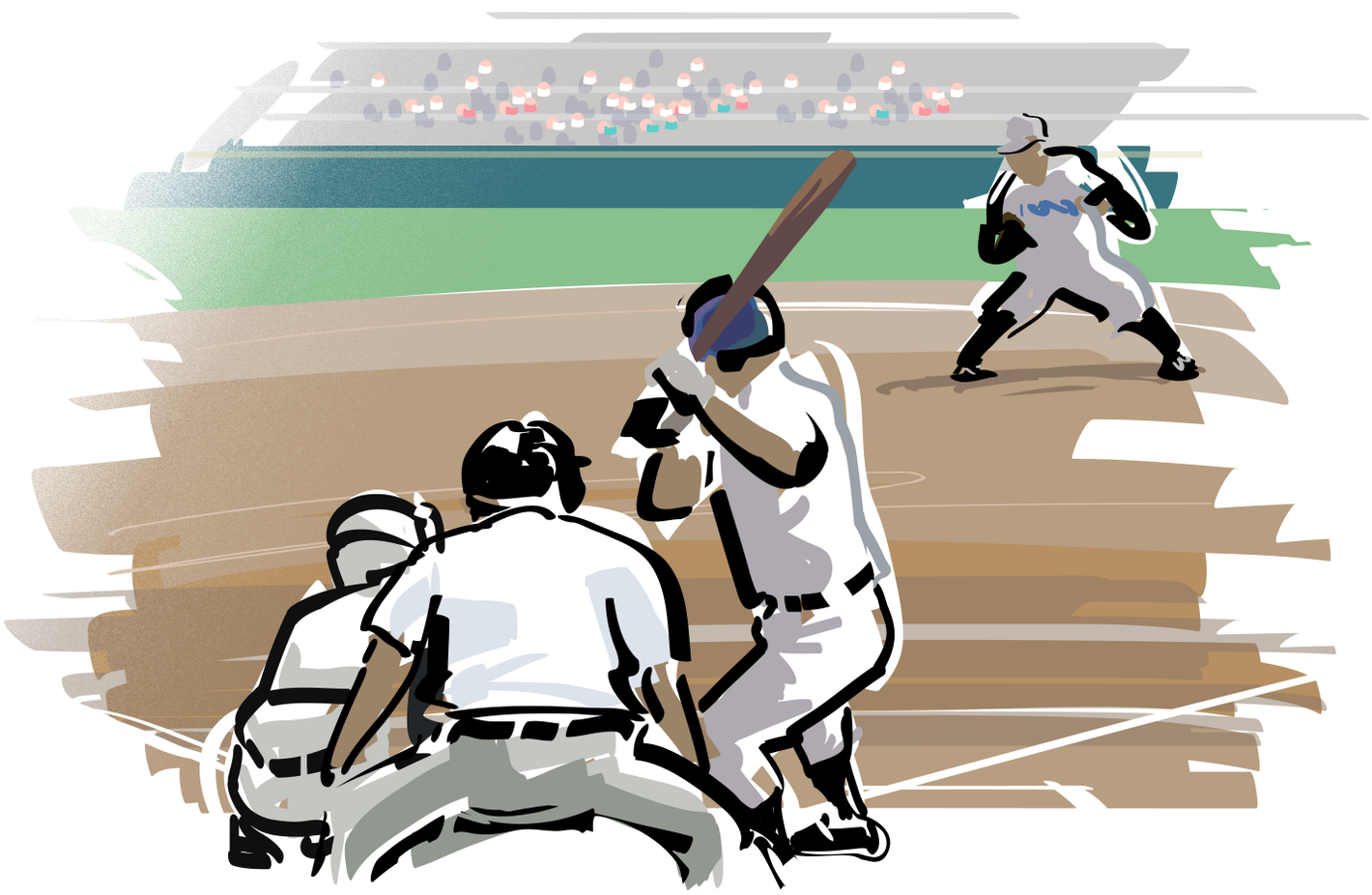
各委員会では，まず，専従の職員を配置したり，法人化を検討したりという体制の整備と，目標を達成するための財源確保とを共通課題として活動を始めたという．その中から，私だけの関心で恐縮だが，普及振興委員会の資格制度検討部会とオペレーション委員会の医科学部会の活動を紹介したい．

資格制度検討部会を置いた目的は指導者の資質向上と基礎的知識の普及であり，目標は資格制度の策定としている．そして全野球指導者を対象とした資格階層の構築と 2018 年度に「基礎Ⅰ」の開始を目指す方向性としている．資格階層の構築とはレベル別の資格をつくるということであり，「基礎Ⅰ」は指導者が最低限知るべき知識である．「基礎Ⅰ」には以下に記したグッドコーチに向けた「7 つの提言」（コーチング推進コンソーシアム，2015）を参考にするとしている．

1. 暴力やあらゆるハラスメントの根絶に全力を尽くしましょう．
2. 自らの「人間力」を高めましょう．
3. 常に学び続けましょう．
4. プレーヤーのことを最優先に考えましょう．
5. 自立したプレーヤーを育てましょう．
6. 社会に開かれたコーチングに努めましょう．
7. コーチの社会的信頼を高めましょう．

ただし，この提言は多くの人が知るところであるし，指導者としては当たり前の内容である．道徳の授業ではないのだから，実際の講習では事例を交えて説得力のあるものにしていく必要がある．特に，指導者の言いなりになりがちな中学生までの野球，その指導者の心に残るものにしていかなければならないと考える．その先のレベルになったら，科学的な内容が入ってくるので研究会の出番となろう．

一方の医科学部会を置いた目的は障害予防であり，目標は野球継続率の増加としている．そして，障害実態アンケート調査の実施，障害予防マニュアルの製作，肩肘検診の普及を方向性としている．マニュアルでは，病院へ行かなくても，選手本人，マネージャー，コー

チ等だけでチェックできるような，各カテゴリーで共通する，分かりやすい（イラスト等を用いる），部位別の検査方法のマニュアルとチェックリスト / フォーマットを用意する必要があるとしている．

野球の競技人口が減っていることを憂いている人がいるが，子どもが身体を動かしてスポーツを楽しんでくれればいいので競技種目を問うことはない．ここでの目標のように，野球を始めた子どもが継続していくことが重要と考える．その継続の最たるものがマスターズ野球かもしれない．今年の神戸でのマスターズ野球の話を楽しみにしたい．